

13. 小児急性白血病人の緩解導入時の感染予防の 適応と方法（勸告案）

赤塚順一*1, 植田 穰*2

1. 感染予防の適応となる対象

ANLLの初回緩解導入時、およびALLの再発例の緩解導入時で、Cytosine arabinoside および daunorubicin 等 anthracycline 系の抗癌剤を含む多剤併用療法を施行する場合を適応とする。

感染予防期間は、緩解導入3日前から、治療終了後2～3週間までとする。

ただし、予防中、感染合併を示唆する症状（38℃以上の発熱が48時間以上続く発熱）が出現した時には本予防処置は中止とする。

なお本案は、無菌病室の設備のない、一般病院での個室治療の可能な場合を設定して計画した。

2. 感染予防の一般的注意

個室の消毒法、患者の保清方法、入室者の注意事項は付項に示した。なお、これらの注意事項が厳密に施行されない抗生物質による感染予防効果は、実効が少ないことを認識すべきである。

3. 腸内細菌叢のコントロールのための Chemoprophylaxis の方法

(1) ST 合剤 (SMX 40 mg + TMP 8 mg) の
0.1 tablet/kg/日, p. o.

(2) Fungisone Syr. 200 mg/日, p. o.

(1)と(2)の併用療法を実施。

4. 副作用

特記すべきことはない。時に上記感染予防中にプロトレピン時間あるいは部分トロンボプラス

チン時間の延長をみとめる例があるので、上記予防期間中、週一回程度のチェックが望ましい。

5. 本法の特色

- 1) 一般個室で実施可能。
- 2) 保護者の室内付添が可能。
- 3) 医療費が比較的安価である。

〔付項〕 感染予防方法

以下の対策は、本研究の対照となるすべての患児に対して実施する。

なお、患児の緩解導入は、小児病棟あるいはそれに準ずる病棟の洗面設備のある一般個室を使用する。

(1) 個室の消毒

- ・まず室内を清掃後、患者用ベッド・母親用折りたたみベッド・床頭台・看護処置台・テレビ・室内手洗用ベーン等、さらに入室後1週間位使用する薬品・検査器具・看護用品を収納する。
- ・ついで24時間、ホルマリンガスによる室内の消毒を行い、次の18～24時間でホルマリンガスを脱気する。それ以後ドア・窓・カーテンはなるべく閉めておき、人・物の出入りは、極力制限する。
- ・室内の器物及び床は、毎日オロナインK液で清掃する。

(2) 患者の入室

- ・入室直前に0.02%のヒピテン液で全身清拭を行い、消毒済ガウンを着用、含嗽・ネブライザー（後述）を施行後入室させる。
- ・患児はなるべくベッド上で生活をするように促し、ベッドの下やクーラーの下には直接患

*1 東京慈恵会医科大学小児科学教室

*2 日本医科大学小児科学教室

児に触れるものや、薬品・看護用品・処置台を置かない。

- ・検査等のため室外に出るときは、ガウン・マスク・帽子を着用し、再入室時は上記と同様の処置を行ってから入室させる。

(3) 患者の皮膚の清拭

- ・毎日の清拭は、0.02%のヒビテン液にて全身清拭を行う。その後、ホルマリンガス消毒した衣服にかえる。頭髮は週に2～3回アルコール洗髪をする。
- ・排泄は室内で行うが、終了後便器は直ちに室外に出し、ヒビテン消毒し、使用時に室内に戻す。便・尿器は直接患児に触れないよう介助する。
- ・排便・排尿後は、0.5%のヒビテン液にて肛門周囲及び陰部の清拭を行う。
- ・耳腔・鼻腔はヒビテンクリームを塗抹する。

(4) 口腔内処置

Fungison 溶液（5%糖液 500 ml に 50 mg を溶解）

ついで滅菌水にて毎日含嗽を行う。

(5) 気道処置

- 1) Kanamycin : 20 mg/日（生食 10 ml に溶解）

- 2) Fungison : 1 mg/日（生食 10 ml に溶解）
上記溶液をネブライザーで1日3～4回吸入させる。

(6) 食事

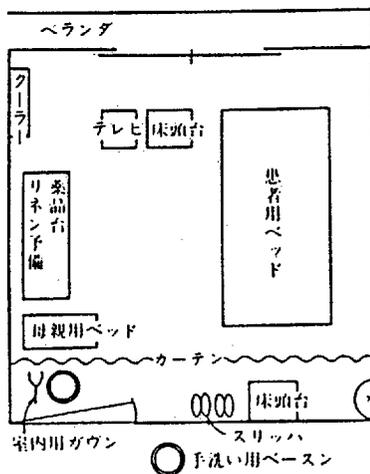
- ・陶器の食器を使用しサランラップで覆い、電子レンジで1400W、30秒間消毒する。
- ・果物は十分洗浄し、果物の缶詰は開缶後陶器の食器に入れ、サランラップで覆い電子レンジで1400W、15秒間消毒する。

(7) 入室者

- ・病室前に設置した0.02%ヒビテン液にてブラッシングした後入室し、スリッパにはきかえ、ホルマリンガス消毒した帽子・マスク・ガウンを着用し、室内の洗面所で流水下せっけんで手洗いし、再び0.02%のヒビテン液でブラッシング後カーテンの内側に入る。
- ・母親の付添は許可するが、ガス消毒済のマスク・帽子・ガウンを着用して上記清拭を行う。

- (8) ネブライザーの容器・薬杯・乳首・スプーン・箸等はミルトン液で消毒する

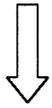
〔付項〕の(1)～(8)のいずれの一つを略しても、その感染予防効果は激減する。



- (1) 入り口で手洗いの後、病棟のはきものから室内専用スリッパにはきかえる
- (2) 手洗いをして室内用ガウンを着用する
無菌室とした部屋の見取り図



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 感染予防の適応となる対象

ANLLの初回緩解導入時,およびALLの再発例の緩解導入時で,Cytosine arabinosideおよびdaunorubicin等anthracycline系の抗癌剤を含む多剤併用療法を施行する場合を適応とする。

感染予防期間は,緩解導入3日前から,治療終了後2~3週間までとする。

ただし,予防中,感染合併を示唆する症状(38℃以上の発熱が48時間以上続く発熱)が出現した時には本予防処置は中止とする。

なお本案は,無菌病室の設備のない,一般病院での個室治療の可能な場合を設定して計画した。